

氏 名	渡 辺 信 夫 わた なべ のぶ お
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 113 号
学位授与の日付	昭 和 52 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	カルヴァンの教会論

論文調査委員 (主 査) 教授 武藤一雄 教授 辻村公一 教授 山田 晶

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、A 5、369頁の公刊された書物として提出されている。

本論文の意図は、宗教改革者カルヴァンの教会思想の再構成にある。

この意図に沿って、本論文は、単に、カルヴァンの教義学体系内における教会論の部分の祖述ないし解釈という方法をとるにとどまらず、より根本的に、カルヴァンの教会思想ないし理論が形成されるにいたった本源の由来を明らかにしようとするものである。

論者自身の本論における研究の根本的姿勢は、あくまで、歴史的ないし文献学的研究に徹しようとするものであるが、しかも論者自身の立場が、カルヴァンの教会思想を再解釈しつつ、それを継承しようとするものであることも、いたるところにおいて、おのずから明らかとなっている。

本論文は、最初の「序説」の部分に次で、三つの主要部分に分たれた本論から成っている。その第一部は、「教会の選び」、第二部は、「教会の結集」、第三部は、「教会の形成」と題されている。

序説においては、論者の研究方法ないしは研究姿勢が明らかにされ、次いで、カルヴァンの教会論において、古代の教会教父（特にラテン教父）の影響が強いことが、克明に跡づけられている。古代における教会論形成期に、強調された概念として「トラディティオ」(traditio)があるが、宗教改革が、一般に「トラディティオ」を拒否したと解される場合が多いのに対し、論者は、人間的伝承の排除と使徒的伝承の尊重とは必ずしも矛盾しないと考え、カルヴァンが、「トラディティオ」における真理契機を生かそうとした人であることを明らかにしている。

教会論に関して、カルヴァンに決定的な影響を与えた教父としては、キプリアヌスとアウグスティヌスが挙げられる。前者のノヴァティヌス論争と後者のドナトゥス派論争のうちに、古代教会的教会論形成の主要動機があるとされる。カルヴァンは、その動機を批判的に継承する。すなわち、カルヴァンの教会思想の主たる要素である「ミニステリウム」は、以上との関連において学びとられたものとされる。

本論文の第一部「教会の選び」は、6章に分かたれて論ぜられているが、そこで論ぜられている最も主

要な点は、教会の選びという問題を、どこまでも、救済史・契約史的出来事として把握するという点である。

カルヴァンの予定論は、選び、召し、義認、栄化の順序をとって発展する救いのわざの発端として理解されるのが通常であり、論者も敢てそのことを否定するものではないが、本論文の強調点の一つは、この救いのわざを、個人の領域において見るのではなく、むしろ、より根源的に、教会の問題として捉えようとするところにある。教会の選びについてのカルヴァンの理論は、旧き契約から新しき契約へ、そして終末における完成にいたるまでの救済史の一貫性のもとに、展開されると考えられている。

使徒信条における「教会を信ず」という告白は、教会の聖・公・一を信じることであり、そこに教会の本質があるとする古典的教会理解があるが、この場合も、本論文は、教会を信じる信仰の本質が、救済史的信仰にほかならないことを主張する。そこからまた、カルヴァンの教会論が終末論的性格を帯び、教会を生かすものが信仰であるとともに、それ以上に希望であることが明らかにされ、「希望の神学者」としてのカルヴァンの面目が明らかにされる。かくてまた、教会信仰が神の国思想とつながる点も究明されている。

第二部「教会の結集」は、「言葉による結集」という章に始まり、「聖餐共同体」という終章にいたるまでの7章から成っている。この第二部は、いわゆる実践神学とのかかわりの深いものである。その基礎論として、まず「神の言葉について」、次いで、「ミニステリウム」についてのカルヴァンの理解が明らかにされる。この基礎論の個別的適用が、教会の実践論にほかならないが、そこにおいて、「礼拝への結集」、「説教」、「聖礼典」、「聖餐共同体の形成」等の問題が取扱われている。特に、カルヴァンの聖餐論の取扱いは、カルヴァンに即して、また論者自身の宗教改革史の研究に即して、詳細に行われている。

第三部「教会の形成」は、6章から成り、「福音的教会法」と題する章に始まり、「教会と国家」、「抵抗権」の問題を取扱っている二つの章を以て終っている。この第三部は、法の神学を媒介とする教会論の展開にほかならないが、それとともに、「教会の形成」という問題にとって、教会における法的秩序のもつ必然的意義が解明されている。しかし、法の神学的位置づけは、カルヴァンの場合、いわゆる律法の「第三用益」の枠内で行われている点が注目されなければならない。それは、法が、律法から福音へとという契約史的連続線上でとらえられた「福音的律法」にほかならないことを意味している。つまり、ここでも、法概念が、カトリック的教会法概念と根本的に異なって、カルヴァンの救済史の神学に根拠づけられていることが主張される。カルヴァンは、このような法の運営を、キリストの支配としての会議に委ねるが、論者は、この会議のもつ意義、構成についても詳説している。

なおこの第三部においては、人文主義との関係における神学教育の問題が、ジュネーヴにおける神学教育の実状を踏まえて、詳細に述べられている。

第三部の終りに位置する「教会と国家」および「抵抗権」と題する二つの章では、カルヴァンのキリスト教綱要 (Institutio Christianae Religionis) 終版 (1559年) の末尾の章における国家論 (「政治的統治について」 De politica administratione) に即して、教会と国家の本来あるべき正常な関係が考察される。それによれば、国家の固有のつとめは、法を守ることであり、それは国内的には公平であり、国際的には平和である。教会と国家の正常な関係は、両者が相互にその分を守った上での相互協力にあり、教会は、

国家をしてその本来の機能に専心せしめるために協力すると同時に、国家もまた教会が真に教会となるために努めなければならないとされる。それとともに、国家権力の限界の問題、正当に成立すべき抵抗権の問題が併せ考察される。この二つの章において、カルヴァンにいたるまでの宗教改革の国家理解（ルター、ツヴィングリ、ブツァー等）が顧みられ、また同じく、宗教改革における抵抗権思想史も概説されている。教会の有すべき抵抗権の問題も、政治理論としてではなく、法の理論として、救済史的ないし終末論的観点のもとで論じられている。

要するに、本論文は、教会を存在論的・宇宙論的にとらえ、空間的に表象する多くの教会論から離れ、カルヴァンの教会論の解釈をとおして、教会を時間的・救済史的に把握しようとするものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、宗教改革者カルヴァンの教会論の詳密な研究である。論者は、「序説」において、カルヴァンの教会論の研究法を三つ挙げ、それらの積み重ねが必要であることを述べているが、論者自身、そういう研究法に従って本書を記述している。その三つとは、1) カルヴァンが教会に関して、直接・間接に論じている言葉を、なるべく多くの文書の中から読みとって、それぞれの文脈の中での正しい意味を確定し、総合的に整理すること、2) カルヴァン研究史の研究（それは、カルヴァン解釈を行い、解釈者の視座を厳密にするのに役立つ）を十分に踏まえること、3) カルヴァンと時代的に隣接する教会論ならびに同時代人の教会論との比較・対照を行うのみならず、彼の教会論を、教会論史、あるいは教会理念史の流れの中に位置づけること、である。

論者は、すでに昭和37年から昭和40年にかけて、カルヴァンの主著である『キリスト教綱要』（*Institutio Christianae Religionis*）を、その最終版（ラテン語版 1559年、カルヴァン自身の手になるフランス語版 1560年）によって、日本語に完訳するという記念碑的労作を達成した人である。論者が、本論文の「あとがき」に述べているように、「カルヴァンの綱要は原文と自分自身の訳文とで繰り返し読んでいて、ほぼ自家菜籠に近い状態にあるつもり」といわれるが、実際、著者は、カルヴァン選集（*Johannis Calvini Opera Selecta*）全五巻の中から、『キリスト教綱要』（ラテン語原典は、この選集の第三巻から第五巻にかけて掲載されている）における教会論にかかわる叙述をはじめとして、自由自在に、しかも適正な仕方でも引用している。なお改革者全集（*Corpus Reformatorum*）の中の Calvin 著作集（*Calvini Opera*）からの引用も見られ、論者のカルヴァンの全著作にわたる造詣が並々ならぬものであることが知られる。

論者は、この三十年間、最大の重点を教会論に置いてカルヴァンを学んできた（「あとがき」参照）といわれるが、本論文は、その見事な研究の結実にはかならない。本論文は、序説および第一部「教会の選び」、第二部「教会の結集」、第三部「教会の形成」から成り、それぞれの部に含まれる諸章は通算20章におよんでいる。それゆえ、ここでは、全体を通観して、すぐれた特色と考えられる幾つかの点について摘記するにとどめたい。

(1) 前に述べたように、論者は、カルヴァン研究史について充分な顧慮を払い、カルヴァン没後現代にいたるまでの、おびただしい英・独・仏の諸文献を読破し、それによって、みずからの研究視座を厳密化することに役立たせている。これは本格的なカルヴァン研究にとって不可欠な作業であると思われるが、

論者の丹念な研究史の研究は、すくなくとも、わが国においては、未曾有のことであるといわなければならない。なお、論者の研究の視座を確定する上に、最も有力な影響を与えているものは、カルヴァン選集 (Opera Belecta) の編集者の一人でもあるW. ニーゼルの「カルヴァンの神学」(W. Niesel, Die Theologie Calvins, 1938) であると思われるが、この書は、論者自身によって邦訳されている。(「カルヴァンの神学」ニーゼル著、渡辺信夫訳、1960年)

(2) 論者の研究法の中で注目されるのは、カルヴァンの教会論を、教会論史の中に位置づけようとする試みであるが、この関連において、カルヴァンと教父学、特にカルヴァンとラテン教父の教会思想との密接な関係が浮き彫りにされている。なかんづく、カルヴァンが、キブリアヌスおよびアウグスティヌスの影響を深く蒙っている点が明らかにされている。論者は、ヒューマニストとしてのカルヴァンを、本論文のいたるところで力説しており、この点が、カルヴァンの人と神学を理解する上に重要な鍵となるものと考えているが、その着眼は、すぐれており、また、カルヴァンの著作の綿密な追求に裏づけられているだけに、大きな説得力をもっている。カルヴァン当時の人文主義は、主として、古典文学の研究であり、彼の人文主義的教養は、当時としては比類なく高度のものであり、古典文学の言語学的な方法による訓詁註解の方法が、聖書研究にも適用され、それがまた新しい人間の生きかたと結びついたとされるが、カルヴァンの古代教会の教会論の継承も、人文主義者としてのカルヴァンと不可分のものであることを、本論文は明らかにしている。要するに、カルヴァンと教父学と人文主義との密接なかわりを明らかにしたところに、本論文の一特色があると考えられる。

(3) カルヴァンの教会観を彼の救済史観(契約史観)の枠内において、どこまでも歴史的・時間的・または終末論的に把握しようとする(教会の存在を平面的・空間的、あるいは宇宙論的に把握しようとする考えが斥けられる)のが、論者の本論文における一貫した姿勢であり、そこに本論文の一特色があることは疑いを容れない。それは、恐らくはカルヴァン神学の特質として、カルヴァン研究者のいずれもが看過しえないところのものであろうが、論者は、その行論の全体において、首尾一貫して、この点に透徹した理解を提示している。

(4) 本論文第二部「教会の結集」においては、神の言葉と説教の問題、ミニステリウムの問題、礼拝の問題等が詳論されているが、なかんづく注目されるのは、カルヴァンの聖餐論である。カルヴァンの聖餐論は、カルケドンのキリスト論と密接なかわりをもつものであるが、論者は、16世紀聖餐論史を顧みつつ、ルター、ツヴィングリ、ブーザー、メランヒトン等の考えを簡明に叙述しつつ、カルヴァンの聖餐論の卓越性を弁証している。カルヴァンが宗教改革者ルターの神学を多くの点で継承している(特に信仰義認論)にもかかわらず、ルターとカルヴァンとの間に若干の相違点の存することも否定できないとされる。聖餐論についてもそうである。本論文は、カルヴァンの聖餐論が、ルターの「キリストの現臨」(Real-präsens)論とツヴィングリの象徴論との対立を超えた高次の視点に立つことによって、それらを包容するものとなったことを述べ、剩すところなく、カルヴァンの聖餐論の意義を闡明している。

(5) 本論文第三部は、「教会の形成」と題され、福音的教会法とか、教会と教育の問題等が論ぜられているが、特に注目すべきは、本論文の最終に位置する「教会と国家」および「抵抗権」の二章である。ここでも論者は、宗教改革の国家理解の視点が救済史観にあることを強調し、カルヴァンにいたるまでの

宗教改革の国家思想（ルター派、再洗派、ツヴィングリ派、ブーツァー等）を顧み、特にルターとカルヴァンの思想を比較している。カルヴァンの国家論が、ルターの二王国説の影響を強く受けていることが指摘されるとともに、カルヴァンがルターの理論を乗り越えている諸点が明らかにされるが、その最も顕著な点は、カルヴァンの場合、ルターに比較して、神の主権がより明確化されることに伴って、地上的権力の条件づけが厳しくなっている点であろう。そして、そこからカルヴァンの抵抗権理論が展開されている。論者は、1550年にいたるまでの宗教改革陣営内の抵抗権思想の流れを概括し、結局、カルヴァンが位置しているのは抵抗権思想の本流であり、ルターのそれは傍流であると断じている。論者は、さらに、カルヴァンの抵抗権思想の歴史的展開・発展について言及し、国家と教会の関係について、単なる政治論の域を超えた深刻な反省を促しているが、この問題の取り扱いが本論文の掉尾を飾るにふさわしい力作というであろう。

以上、不十分ながら、本論文の幾つかの特色を挙げた。論者は、すでにカルヴァンに関する幾つかの著書、論文を公刊しており、衆目のみるところ、わが国におけるカルヴァン研究の第一人者とみなされている人であるが、本論文は、学術論文として、わが国のカルヴァン研究の最高峰をなすものであることは疑いを容れないところである。

論者は着実な歴史的研究を旨として、本論文を叙述しているが、その背後に、カルヴァンの教会理論を骨子とする論者自身の神学（実践神学をも含めて）が存し、それによって、本論文は一層迫力のこもった説得性をもつものとなっている。しかし、その反面、カルヴァン主義の視点を超えて、カルヴァンの提示する諸問題を、カルヴァン没後4世紀以上を経た現代世界の神学的・哲学的状況に照らして、さらに根源的な反省を加えるという点に欠けている憾みがないとはいえないであろう。あるいは思想史的にも、例えば、また、ルターとカルヴァンとの対比というような問題についても、より綿密な省察がなされて然るべきではないかと思われる。さらにまた、神の言葉（説教）と聖餐とについても、より根本的な究明がなされることが望ましいと思われる。

しかし、上述してきたようなすぐれた特色をもつ本書は、本邦におけるカルヴァン研究の白眉ともいえるべく、カルヴァンの「教会論」としては、世界的水準をも摩するものではないかと思われる。特にわが国のキリスト教学界、宗教学界に寄与する学問的貢献は大きいといわなければならない。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。